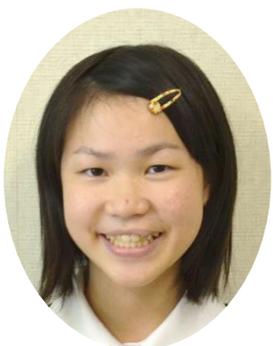


《小学校高学年の部》

「広かれ、優しいさの輪」

有田市立宮原小学校 6年

竹中^{たけなか}美結^{みゆ}さん



「お先にどうぞ。」

とドアを開け、高齢者を敬って先に行かせる私。少し前までは、自分の事だけを考えて毎日を過ごしていたけれど、今は少し違う。この前「高齢者疑似体験」の授業を受けて、高齢者のつらさを自分自身の体で感じ心に深く刻みつけられたからだ。

例えば、一日の中でもよくつかう「歩く」という行為だけでも高齢者は一苦労だ。私もおもりをつけたジャケットを着用して、足が曲がらないように専用のテープをすると、高齢者がよく言う「肩が痛い」という意味がよく分かった。また、一度こけてしまうと一人で起きあがろうとしても手足をバタバタさせることしかできず、体もしんどかったし、心もずつしりつつかれを感じた。ほかにも円背（事務局注：腰や背中が曲がって丸くなった状態）を体験するための器具をつけると、立っているだけでも腰がいたいし、重い荷物を持つと思うように力が入らないので手がちぎれてしまうのではないかとこのほど苦しかった。

このような体験をして、子どもの私たちが当たり前に感じていることでも、高齢者はしんどくてつらいものだ、ということが分かった。また、私は大人になれば何でもできると思っていたが、年を重ねるにつれてできなくなることに、しづらくなったりもあるのだと実感した。これからは、電車やバスなどにある高齢者優先席はゆずってあげたり、ドアを開けてあげたりすること、お手伝いを今まで以上にしていこうと思う。そう考える人が増えていけば、誰もが住みよい思いやりのある町になっていくと思う。

